「飲酒」〈其五〉の詩の一解釈

―その帰鳥のイメージと『易』との関連を中心として―

沼口勝

一

東晋王朝（三一七―四二〇）の後半期から劉裕（三五六―四二二）の創建になる宋王朝（四二〇―四七九）の初期にかけて生きた詩人陶淵明（三六五―四二七）の代表作「飲酒」（二十首）〈其五〉の詩の解釈をめぐっては、極言すればその一字一句について、古来さまざまな見解が提示されてきた。

ところで私見によれば、「飲酒」というこの詩題は、実は二種の相異なる典拠と、そのそれぞれに託した相異なる寓意とをもつ、複雑に工夫された表現ではないかと考えられる。その詳細については、紙幅の都合上別稿①に譲ることとし、大要のみを記せば次のごとくである。

劉裕が、義熙五年（四〇九）より同十四年（四一八）に至るの間、鮮卑族禁容氏の南燕国を滅ぼし、また、南から都建康へ進攻してきた盧循の乱を掃討し、さらに羌族姚氏の後秦国を滅ぼした対外軍事行動は、裕自らが「南征北伐」（『宋書・庾亮伝』）と称しているように、当時においてこれを『詩経』小雅「六月」「采芑」の二篇に詠う、周の宣王の玁狁・蛮荆征伐、所謂「宣王の北伐・南征」（「小序」）に擬する事実があったと認められる。そして、陶淵明はこれを踏まえ、劉裕が義熙十四年正月、後秦遠征から故郷彭城（安徽省徐州市）に凱旋・祝勝したことを、漢の焦贛の撰と伝える『易林』中の繇辞「六月・采芑は、无道を征伐す、張仲・方叔（ら）、敵に克つて酒を飲む」（離之坎・小過之未済）の「飲酒」の語により寓意させたものと考えられる。繇辞の下の二句は、祝勝の宴において文臣（張仲）武臣（方叔）こぞって喜びの杯を挙げたことをいう。

劉裕は後秦遠征の後、同年六月、相国・宋公・九錫の命を受け、晋宋禅代の機運はいちだんと熟し、十二月には安

帝（司馬徳宗）を弑し、恭帝（司馬徳文）を立てる。このように劉裕による禅代が強力に推進されてゆく時勢をも、陶淵明は前述の「飲酒」の語によって寓意させたものであろう。したがって「飲酒」の連作は、義熙十四年の秋の制作とすることが妥当と考えられる。

『易』の「未済」の卦「上九」の爻辞（とその小象）は、『易』において唯一「飲酒」の語を用いる箇所である。この「上九」の爻辞「孚有りて于に酒を飲む、咎无し」が、前述の『易林』の繇辞とともに、「飲酒」という詩題の別の典拠となるものであろうと考える。魏の王弼（二二六―二四九）の解釈によれば、「有孚」とは為政者に対して信頼をもつこと、また「飲酒」とは逸楽する意であるという。宋の謝靈運（三八五―四三三）が義熙十四年九月九日、宋公劉裕主催の彭城の戯馬台の宴集において、隠退する尚書令孔靖（字季恭）を送別した作「九日従宋公戯馬台集送孔令詩」の中で、「餞宴は孚有るを光らかにし」といい、「有孚」の語を、劉裕に対する信頼を表す意に用いるのは、王弼の解釈に従う例と考えられる。しかし、陶淵明の場合、「有孚」の語を、天命に対して信頼し、そして自ら至誠を貫くこと、「飲酒」の語を、自適することと解し、前述の東晋末の時勢の中で、隠者として生きる自らの精神態度を寓意させたものと推測されるのである。

さて、右のごとき論拠からする見方は、「飲酒」の連作に関する従来の諸解釈になかったものである。したがって、かかる見方からすれば、〈其五〉の詩の解釈においても、当然従来の見解と異なる見方が生ずるはずである。

小稿は、「飲酒」〈其五〉の詩を、その詩題の典拠と寓意との関連、および連作の他の詩の内容、ことに帰鳥のイメージと『易』との関連において検討考察し、新しい解釈の可能性を探ろうとするものである。

二

「飲酒」〈其五〉の詩には、仲間と連れ立って山に帰る飛鳥の姿が詠われている。このようにねぐらに帰る鳥、すなわち帰鳥の姿を詠うのは、「飲酒」の連作中、右の詩の外に〈其四〉と〈其七〉の二首の詩がある。これら三首の詩に詠う帰鳥の姿を要約すれば、次のごとくである。

まず、〈其四〉の詩は、その全文を失群の鳥の叙述に当て、群れを失った孤独な鳥がねぐらを索めて夜ごと悲鳴徘徊し、やがて一本松に会い、その木蔭に身を託することがかない、これを終の棲みかと思い定めることを詠う。続く〈其五〉の詩では、夕刻山気の美しい中、麓をさして仲間

と連れ立ち帰る鳥の姿が、そして〈其七〉の詩では、日没後の安息のひとときに、林のねぐらに帰る鳥の鳴き交わす姿が、それぞれ二句に詠われている。

右の三首の詩に詠う鳥の中、〈其四〉の詩の鳥を作者の自況と解することは、諸家の説の一致するところであろう。他の二首の詩の鳥については、実景ないし自況（象徴とも）として解されているようである。

ところで淵明には、「飲酒」詩を制作する義熙十四年以前の時期にも、同じく帰鳥の姿を再三詠うことがあった。彭沢の令の職を辞して帰隠する義熙元年（四〇五）十一月からその翌年にかけての時期がそれに当たる。その時期の作とされる「帰去来兮辞」に「雲無心而出岫、鳥倦飛而知還」と詠うのが、その一例である。また、同じく「帰園田居」（五首）〈其一〉の詩に、「少無適俗韻、性本愛丘山、誤落塵網中、一去十三年、羈鳥恋旧林、池魚思故淵、開荒南野際、守拙帰園田、（略）久在樊籠裏、復得返自然」と詠うのは、官を辞して帰隠した自らを、半ば帰鳥の姿を意識しつつ表現したものであろう。そして、最も代表的な例として、四言・四章から成る「帰鳥」の詩がある。左にその全文を掲げる。

翼翼帰鳥　翼翼たる帰鳥

晨去于林　晨に林より去り
遠之八表　遠くは八表に之き
近憩雲岑　近くは雲の岑に憩う
和風弗洽　和風　洽からずして
翻翮求心　翮を翻えして心に求む
顧儔相鳴　儔を顧みて相鳴き
景庇清陰　景を清き陰に庇われん

翼翼帰鳥　翼翼たる帰鳥は
載翔載飛　載ち翔け り載ち飛ぶ
雖不懐游　游を懐わずと雖も
見林情依　林を見れば情は依る
遇雲頡頏　雲に遇えば頡頏し
相鳴而帰　相鳴きて帰る
遐路誠悠　遐かな路は誠に悠かなるも
性愛無遺　性　の愛するところ遺るる無し

翼翼帰鳥　翼翼たる帰鳥は
相林徘徊　林を相て徘徊す
豈思天路　豈に天路を思わんや
欣及旧棲　旧棲に及ぶを欣ぶ

雖無昔侶　昔の侶は無しと雖も
衆声毎諧　衆声　毎に諧う
日夕気清　日夕　気清く
悠然其懐　悠然たり　其の懐い

翼翼帰鳥　翼翼たる帰鳥は
戢羽寒条　羽を寒の条に戢む
游不曠林　游ぶは曠いなる林にせず
宿則森標　宿るは則ち森き標
晨風清興　晨風　清らかに興り
好音時交　好音　時に交う
爛縦奚施　爛縦　奚ぞ施さん
已巻安労　已に巻めり　安んぞ労せんや

これは、ひとたびは世界のかなたまで天翔けんとこころざした鳥が、期待した和風に恵まれず、故郷の林のねぐらに帰り、心の平安をとりもどすことを詠った詩である。その末尾の句「已巻安労」と述懐する点においても、「帰去来兮辞」に「鳥倦飛而知還」と詠うことと重なり、この時期における作者の心境を譬えたものであることが知られる。「帰鳥」の詩に詠う飛鳥の姿は、以下に検討する「飲酒」詩のそれと深い関連をもつものと考えられる。

まず「飲酒」〈其四〉の詩を左に掲げ、考察を加えたい。

栖栖失群鳥　栖栖たり　失群の鳥
日暮猶独飛　日暮れて猶お独り飛ぶ
徘徊無定止　徘徊して定止無く
夜夜声転悲　夜夜　声転た悲し
厲響思清遠　厲響　清遠を思い
去来何依依　去来　何ぞ依依たる
因値孤生松　孤生の松に値えるに因り
斂翮遥来帰　翮を斂めて遥かに来たり帰る
勁風無栄木　勁風に栄木無きも
此蔭独不衰　此の蔭のみは独り衰えず
託身已得所　身を託するに已に所を得たり
千載不相違　千載　相違らざらん

吉川幸次郎氏は、かつて「飲酒」〈其五〉の詩に詠う飛鳥にちなんで、淵明の詩文に現れるそれについて語られたことがある（『陶淵明伝』②五）。その中で「帰鳥」の第一章・第三章を引きつつ、そこにおける鳥よりも「更にあわれな、最も不幸なのがいる。それはねぐらを持たない鳥。そうした孤独な鳥が、ねぐらとなるべき木を見いだしたときの喜び、それを歌うのは、おなじ『飲酒二十首』の第四首」であるとして、この詩を引用し次のごとく言われる。

この一首も、淵明の自叙であること、疑いをいれない。

長い長い漂泊ののちに、見いだした孤生の松とは、人の世のつめたさにもてあそばれつくされたのち、やっと見いだした心のよりどころを、それにたとえていうに、相違ない。それが具体的に何であったかは、依然として淵明の語らぬところであるが、見のがしがたいのは、この詩のもつ沈痛なひびきである。……淵明の生涯が、その詩の表面にたたえられた平静さにも似ず、苦悩に富んだものであったことを、この詩もまた示すがごとくである。

吉川氏の指摘のごとく、〈其四〉の詩の鳥は、「帰鳥」の詩のそれに比較して帰るべきねぐらを持たない、あわれで不幸な存在として描かれている。

しかし、私は、〈其四〉の詩において、「失群の鳥」として比喩的・象徴的に詠うことがらは、「帰鳥」の詩に鳥の姿として比喩的・象徴的に詠うそれと、実は同一の体験、すなわち義熙元年の帰隠の際の体験、もしくは帰隠に至るまでの体験に基くものではなかったかと推測するのである。その根拠として、この二首の表現の間に見ることのできる重複・類似性、また、〈其四〉の詩中の「去来何依依」という句、さらに義熙十四年頃の作者の状況などを挙げることができる。次にそのことについて述べたい。

「帰鳥」の詩の「雖無昔侶、衆声每諧」の句に、清・何焯が注して、「鄰曲妻孥、雖不如中朝旧侶為多才、然真趣則相入也」(清・陶澍注『靖節先生集』所収)という。つまり何焯は、「昔侶」を「中央政府の多才な旧友」と解するのであるが、吉川氏も「中央政府にいたときのような仲間、つまり野心のかたまりのような政治家、軍人、機智の言葉にたけた知識人、ひとりよがりの哲学者、要するに人をおしのけることによってみずからの存在を主張しようとするはなやかな仲間」と敷衍する。私は、この「昔侶」の語のさす対象が、〈其四〉の詩の「失群の鳥」という語の「群」に相当するのではないか、つまり「失群の鳥」とは、「昔侶無し」と詠われている「帰鳥」の詩の鳥のことではないかと考える。

魏の曹植(一九二―二三二)の「雑詩」(六首)〈其三〉の詩に、「飛鳥繞樹翔、噭噭鳴索群」というように、古来詩賦において、その伴侶や群れを失った鳥は、わが身の孤独を悲しみ、失った群れを索めるものとして詠われるのを通例とする。ところがこの「失群の鳥」は、かつて属した群れを索めようとしない。その理由は、おそらくその群れ、換

言すれば作者の属した官界における仲間が、彼れにとって索める価値のない、むしろ唾棄すべきものでしかなかったことにあるのであろう。

また、〈其四〉の詩の第六句「去来何依依」の「依依」という語の、陶淵明における用例と用法を検討すると、次のごとくである。

①商歌非吾事、依依在耦耕（辛丑歳七月赴仮還江陵夜行塗口）
②歩歩尋往迹、有処特依依（還旧居）
③曖曖遠人村、依依墟里煙（帰園田居其一）
④徘徊邱隴間、依依昔人居（同右、其四）
⑤依依旧楚、邈邈西雲（答龐参軍）

右の諸例は、③を除き、いずれも作者の、旧（もと）の生業①、旧居②、故郷の光景④、曾遊の地⑤など、かつての体験につながる懐かしさ・慕わしさを表しているようである。また、③も、しなやかなさま、遠くぼんやりしたさまなどと解する外に、慕わしいさまと解する説がある。陶淵明における「依依」の語意は、懐かしさ・慕わしさを表す方向に収斂するといえよう。したがって「去来何依依」の句の場合も、右に見た方向で解するのが妥当であって、この「失群の鳥」が「依依」として「去来」する「孤生の松」の存する所は、かつて慣れ親しんだ故郷の地と理解すべきであろう。なお、この第六句は、「帰鳥」の詩の「相林情依」の句と類似する表現であることを付言したい（ただし「相林情依」を「馴林徘徊」に作る本もある。）

さらに同じく第八句「斂翮遥来帰」に注目すると、この表現が、遠く「八表」にゆき、「和風」に恵まれずして、「遐路」を経て「旧栖」に帰り着いた、「帰鳥」の詩の鳥の姿を彷彿とさせることに気づく。「失群の鳥」が作者の自叙であるとすれば、右の「遥来帰」というごとき行跡を、帰隠以後の作者の伝に求めることは困難であろう。

以上の考察により、〈其四〉の詩の冒頭からの八句（「栖栖失群鳥、……斂翮遥来帰」）は、作者の義熙元年の帰隠の際の体験と心情とを追懐して、これを鳥の姿に託したものと解釈することができるであろう。そして、第九句からの四句（「勁風無栄木、此蔭独不衰、託身既得所、千載不相違」）は、帰隠以来の隠者としての処世が、厳しい時勢に生きる道として誤りでなかったことを述懐したものとするのが、妥当な解釈といえよう。なお、この詩に沈痛のひびきがあるのは、時代の趨勢が、作者にとって、「帰鳥」の詩制作の頃よりも、いちだんと厳しさを増して感じられたことを反映しているのであろう。

さて、〈其四〉の詩には、『易』ことにその王弼注との関

連を指摘することができる。次にそのことについて述べたい。

この詩の第五句「厲響思清遠」の「清遠」の語について、一海知義氏は次のごとく注釈している。

〔思清遠〕　清らかなはるかな境地に思いをはせる。「易経」の漸の卦の王弼注に「進処高潔、位に累わされず、物の其の心を屈し、其の志を乱すなく、峨峨として清遠……」とある（『陶淵明』③）。

「清遠」の語の典拠を、「漸」の卦「上九」の爻辞に付す王弼注に求める氏の説は妥当なものと考える。これについて改めて検討を加えたい。

䷴ 艮下巽上　漸

上九、鴻漸于陸、其羽可用為儀、吉。

上九、鴻陸に漸む。其の羽用て儀と為す可し、吉なり。

〔王弼注〕進処高潔、不累于位、無物可以屈其心而乱其志、峩峩清遠、儀可貴也、故曰、其羽可用為儀、吉。進んで高潔に処り、位に累わされず、物の其の心を屈し、其の志を乱す可き無く、峩峩として清遠、儀貴ぶ可きなり、故に曰く、其の羽用て儀と為す可し、吉なりと。

右の爻辞の一節「鴻漸于陸」は、「九三」の爻辞の冒頭の句と同文で、ここには少しく問題が存するようであるが④、紙幅の都合上しばらく不問に付し、王弼注の「清遠」の語義の把握に進みたい。

王弼の『易』解釈においては、「上」は無位であるがゆえに、位に累わされることのない高尚な隠者に擬されている。例えば、「位に累わされず、志賢を尚ぶ者なり」（大有の卦・上九の爻辞の注）、「位に累わされず、王侯に事えず、其の事を高尚にするなり」（蠱の卦・上九の爻辞の注）、「位に在らず、最も上極に処り、其の志を高尚にし、天下の観る所と為る者なり」（観の卦・上九の爻辞の注）、そして「位を履まず、深く自ら幽隠し、跡を絶ち深く蔵れる者なり」（豊の卦・上九の爻辞の注）などという。したがって、この「漸」の卦「上九」の爻辞も、進んで高潔の境地に居て、位に累わされることがなく、いかなる世俗もその心志を屈し乱すことができない、崇高清遠な鴻の姿のごとき隠者、また、その境地を象徴するのである。とするならば、〈其四〉の詩の「失群の鳥」が「清遠を思う」姿とは、隠者としての清遠な境地を希求してやまない、作者の強い願いの象徴として理解すべきものであろう。

ところで、「失群の鳥」が、悲鳴しつつねぐらを索める姿も、実は右に同じく、王弼注に由来するのではないかと

考えられる。「小過」〔䷽ 艮下震上〕の卦辞とその王弼注、および唐・孔穎達の「正義」の文を左に掲げる。

小過、亨、利貞、可小事不可大事、飛鳥遺之音、不宜上宜下、大吉。

小過は、亨る。貞しきに利ろし、小事には可なり、大事には可ならず、飛鳥之が音を遺す、上るに宜しからず、下るに宜し、大いに吉なり。

〔王弼注〕飛鳥遺其音、声哀以求処、上愈无所適、下則得安、愈上則愈窮、莫若飛鳥也。

飛鳥其の音を遺す、声哀しくして以て処を求む、上れば愈よ適く所无く、下れば則ち安きを得、愈よ上れば則ち愈よ窮す、飛鳥に若くは莫し。

〔正義〕曰、鳥之失声、必是窮迫、未得安処、論語曰、鳥之将死、其鳴也哀、故知遺音即哀声也。

曰く、鳥の声を失するは、必ず是れ窮迫して、未だ安処を得ざるなり。論語に曰く、鳥の将に死なんとするや、其の鳴くこと哀し、と。故に知る遺音は即ち哀声なりと。

右の卦辞の一節「飛鳥遺之音、不宜上宜下、大吉」とは、その「彖伝」に「有飛鳥之象焉、飛鳥遺之音、不宜上宜下、大吉、上逆而下順也」と説くごとく、古来卦の象が飛鳥に擬えられ（「三」「四」の陽爻が鳥の胴体、「初」「二」と「五」「上」の四陰がその両翼を張って飛ぶさま）、それが鳴き声を残して飛ぶとき、高く空に上れば行く所がなくてよろしからず、降下すれば安処を得てよろしいという意である。これを人事に当てるならば、官途について出世するのはよろしからず、下野して隠棲すればよろしいという意となる。

右の卦辞についての王弼注を、「正義」を参考にしつつ解すれば、以下のごとくとなるであろう。すなわち、飛鳥が鳴き声を残して飛び、その哀声をあげるのは、窮迫して安処を求めているのである、その際、空に上ればいよいよ行く所がなく、下れば安息を得ることとなる、上ればいよいよ窮するのが飛鳥の運命であるという。

〈其四〉の詩に表現される、「失群の鳥」が悲しい声をあげつつ「定止（おぐら）」を求めて徘徊する姿は、作者が王弼注の「声哀以求処」という句から暗示を受けて生まれたものではないであろうか。

三

前章において取り上げた『易』の「小過」の卦辞は、『易』で唯一「飛鳥」の語を用いるものである。私は、この卦

象・卦辞と、「飲酒」〈其五〉の詩に表現される飛鳥の姿とが、深い関連をもつものではないかと考える。まず、〈其五〉の詩を左に掲げる。

結廬在人境　廬を結びて人境に在り
而無車馬喧　而も車馬の喧無し
問君何能爾　君に問う　何ぞ能く爾るやと
心遠地自偏　心遠ければ地自ら偏なり
采菊東籬下　菊を采る　東籬の下
悠然見南山　悠然として南山を見る
山気日夕佳　山気　日夕に佳なり
飛鳥相与還　飛鳥　相与に還る
此中有真意　此の中に真意有り
欲辨已忘言　弁ぜんと欲して已に言を忘る

詩の構成を見ることとしよう。冒頭の四句では、人里に廬を構えながら喧騒と無縁の暮らしができるのは、自らの隠者としての清遠の境地によるものであることを確認している。続く第五―八句で、東籬の下で菊花を採りながらふと目に入った南山（廬山）の姿と、夕もやの立ちのぼるその山に連れだち帰る飛鳥の景を詠う。そして末尾二句は、上述の光景にこそ「真意」があり、それが言語で説明しがたい境地であることを示唆するのである。

ここで第五―八句に表現される光景と境地、および末尾の二句について考察したい。

「帰鳥」の詩の第三章に「雖無昔侶、衆声毎諧、日夕気清、悠然其懐」といい、故郷の山林に帰った鳥が仲間たちと調和しつつ、秋の夕暮れの清澄な自然と一体となった遥かな境地をよろこぶさまが詠われている。そうしてこれが、〈其五〉の詩の第五―八句の光景と境地に共通するところのあることに気づくのである。おそらく、秋の夕暮れの清澄な気の中を仲間たちと山林に帰る鳥の姿は、作者にとって深い意味をもつものであったにちがいない。菊を採りながらふと目にした南山、その夕もやの立ちのぼる山麓の林に連れだち帰る鳥の姿、この日ごろ親しんでいる光景を目にしたその瞬間、作者の脳裏に閃いたのは、この山に帰る鳥たちの姿こそ、「小過」の卦象〔䷽ 艮下震上〕（全体が飛鳥の姿、内卦が山、外卦が雷を表す）と、「飛鳥遺之音、不宜上宜下、大吉」というその卦辞の具象化されたものであるとする強い確信であったのではないか。そうしてその鳥たちのごとく、人境に廬を結んで隠棲する自己の処世の道が、『易』に示された聖人の教えに合致するものであったことを、作者は瞬時に悟得（自覚といっても可）したのではなかったか。その悟得の境地を、「此中有真意」と表現

したものと思う。すなわち、「真意」とは、自然の営みの中に啓示された聖人の教えということができよう。[5] そして悟得の境地に到達した悦びを、結びの句「欲辨已忘言」と表したのであろう。

次に右の末尾二句について考察を加えたい。周知のごとく、『文選』巻三十「雜詩下」にこの詩を録するが、その「此還有真意、欲辨已忘言」の二句に対し、唐・李善は左に掲げる『荘子』「外物」篇の一節を注している。

荃者所以在魚、得魚而忘荃、蹄者所以在兎、得兎而忘蹄、言者所以在意、得意而忘言。

荃は魚に在る所以なれば、魚を得て荃を忘れ、蹄は兎に在る所以なれば、兎を得て蹄を忘れ、言は意に在る所以なれば、意を得て言を忘る。

あらためて説明するまでもないが、右の文章は、ことばは意、すなわち人生の真実をとらえるための道具であって、それをとらえてしまえば忘棄されていいというのである。

従来の解釈では、この「外物」篇のことばを以て末尾二句の脚注として十分であるとしてきた。しかし私見のごとき「小過」の卦象・卦辞と末尾四句とが深く関連しつつ詠われているとする立場からは、この外になお『易』の「繫辞伝」の左の一節を、その脚注に加えたいと思う。

子曰、書不尽言、言不尽意、然則聖人之意、其不可見乎。子曰、聖人立象以尽意、設卦以尽情偽、繫辞焉以尽其言、変而通之以尽利、鼓之舞之以尽神。（繫辞上）

子曰く、書は言を尽くさず、言は意を尽くさずと、然らば聖人の意は、其れ見る可からざるか。子曰く、聖人は象を立てて以て意を尽くし、卦を設けて以て情偽を尽くし、辞を繫けて以て其の言を尽くし、変じて之を通じ以て利を尽くし、之を鼓し之を舞し以て神を尽くす。

周知のごとくこれは、魏晋六朝時代盛んに論議された「言尽意・不尽意」という主題のもととなった文章である。その要旨は、書は言を尽くしきれず、言は意を尽くしきれない、そこで聖人は『易』の「象」や「卦」を設けてその真意・真実を完全に表し、これに卦辞・爻辞を付してその言わんとするところを、完全に表そうとしたというのである。[6]

陶淵明は、夕暮れに鳥たちが山に帰る光景から「小過」の卦象・卦辞を連想し、そこに啓示された聖人の真意（教え）を感じ悟得し、それを「此中有真意」といい、その深いよろこびを「意を得て言を忘る」という『荘子』のこと

ばに拠りつつ「欲辨已忘言」と表現したものであろう。

以上の考察により、〈其五〉の詩に現れる山に帰る飛鳥の姿は、義熙元年より十三年間に及ぶ隠棲の暮らしこそ、聖人の真意にかなう処世の道であることを作者に悟らせ、深いよろこびと自信とを与えるものであったとすることができよう。

続いて〈其七〉の詩の帰鳥について検討しよう。左にその詩を掲げる。

秋菊有佳色　　秋菊　佳色有り
裛露掇其英　　露に裛れたる其の英を掇む
汎此忘憂物　　此の憂いを忘るる物に汎かべて
遠我遺世情　　我が世を遺るるの情を遠くす
一觴雖独進　　一觴　独り進むと雖も
杯尽壺自傾　　杯尽き　壺自ら傾く
日入群動息　　日入りて　群動息み
帰鳥趨林鳴　　帰鳴　林に趨きて鳴く
嘯傲東軒下　　嘯傲す　東軒の下
聊復得此生　　聊か復た此の生を得たり

ここには露にぬれた菊の花を、「忘憂の物」と愛称する酒に浮かべ、ひとり杯を傾けつつ、日没後の静けさの中、ねぐらさして林に帰る鳥の鳴き声にくつろぐ作者の姿がある。そして帰鳥の姿は、わずか一句に詠うにすぎない。しかし、〈其四〉〈其五〉の二首に詠う帰鳥の姿にこの〈其七〉の詩の帰鳥を重ね、三首一連のものとして見るならば、孤独な鳥が故郷に身を託する所を得、自然の中で仲間とともに自適するまでに至る姿を表現するものであることに気づく。〈其七〉の詩の帰鳥もまた、作者自身の投影と解されよう。

ところで、吉川氏は前掲書において、「この詩のもつ曠達自在の面」を認めつつ、次のごとくいう。

しかし日没してすべての物音がたえてのち、独酌の盃を手にしつつ、林にいそぐ鳥の声に耳をかたむける淵明の姿には、やはり何か沈痛のものが感ぜられる。酒に名づけて、「憂いを忘るる物」というのは、たちきりがたい憂いがあるからでないか。「我が世を遺てし情を遠む」というのは、世を遺てかねているのではないか。

吉川氏の指摘される、淵明のたちきりがたい憂いとはなにか。義熙十四年冬の作とされる「歳暮和張常侍」の詩にいう。

向夕長風起　　夕に向かいて長風起こり
寒雲没西山　　寒雲は西山に没す

厲厲気遂厳　厲厲として気遂に厳しく
紛紛飛鳥還　紛紛として飛鳥還る。

厳酷な気象に追い立てられて、紛々とねぐらに急ぐ鳥は、劉裕の暴政を逃れんとする人々の象徴として読むことができる。淵明のいだく憂いのたねのひとつは、これと関わりがあると考えられる。

四

「飲酒」という詩題は、前述したごとく、『易』と『易林』のことばを典拠とするものと推測される。そして「飲酒」〈其四〉〈其五〉の二首の詩に詠う帰鳥が、『易』の卦象・卦辞・爻辞、およびその王弼注と深い関連性をもつ可能性のあることが明らかとなった。かくのごとき「飲酒」の詩と『易』との関係から、作者の陶淵明が、この連作を制作したと推定される義熙十四年の秋、『易』に対して強い関心を寄せていたであろうことが知られる。それはいかなる動機によるのであろうか。

「繫辞伝」の記述によれば、『易』の作者は憂患をいだいていたこと、また、その憂患が文王の殷紂に困しんだ事に関連するものと推測され、その故に『易』のことばは危懼にみちているのだという。そして、自ら危惧する者を平安にし、懼れ慎しむ心を以て終始すれば、咎なきに帰することができるのが、『易』の道であるという。⑦

ここに説かれる『易』の由来・本質を考えるとき、淵明はその時期、深い憂患にとらわれて、その解決を『易』の道に求めることがあったに相違ない。

それでは、淵明がいだいた憂患とは、いかなるものであったのであろうか。

その複雑な全体像を解明することは、紙幅の都合上、避けざるを得ないが、その一端については、以上の論述によりすでに明らかであろう。すなわち、晋宋禅代の機運の熟す時代の趨勢の中で、淵明はそれをいかに受けとめ、また、自らいかに生きるべきかということに苦悩したと考えられる。具体的には、劉裕の新政権に帰属することへの勧誘があったのではないかと考えられる。「飲酒」〈其九〉の詩には、田父が出仕を勧めるのに対し、作者が辞謝する場面が描かれているのである。

上述した「飲酒」〈其四〉〈其五〉〈其七〉の詩に現れる帰鳥の姿は、右の点について、隠者としての道を貫こうと決意する、作者の精神の軌跡を表したものである。ことに〈其五〉の詩は、隠者としての処世が聖人の意にかなうものであることを悟得したという、作者の精神史において画

期的な体験を表出した作である。この詩以後の「飲酒」の諸篇が、手法的に多様化し、主題や主張が鮮明化して、自由で豊かな作風に転ずるように見えるのも、右に述べた悟得の効果ではないかと考えられる。

なお、最後に一つ付言したいことがある。

「飲酒」〈其四〉の詩に表現される帰鳥の姿は、「帰鳥」の詩に比喩された、義熙元年の作者帰隠の際の体験と心情とに基くものであろうと述べたが、このことから逆に、作者をして官を辞して帰隠させたその原因を照射することができるであろう。それはおそらく劉裕の幕下に帰属することを、作者が嫌ったことにあるのではないかと考える。しかし、これについての論述は、別の機会にまちたい。[8]

注

① 拙稿「陶淵明の『飲酒』の詩題の典拠とその寓意について」（「六朝学術学会報」第一集・六朝学術学会、に登載の予定）

② 『陶淵明伝』（昭和31年・「新潮叢書」、後、昭和33年・「新潮文庫」、さらに昭和43年『吉川幸次郎全集　7』筑摩書房、所収、また平成元年「中公文庫」）

③ 『陶淵明』（昭和33年、「中国詩人選集・第4巻」岩波書店）

④ 宋の程頤（一〇三三―一一〇七）の『易伝』にその師胡瑗の説として、「陸」を「逵」（「雲路」の意）に作るべしとすることをいう。「九三」と「上九」とが同じく「陸」に作るのは疑わしいが、王弼の用いたテキストはそう作っていたと考えられる。王弼は、「陸、高之頂也」と注する。

⑤ 福永光司氏「陶淵明の『真』について」（「東方学報・京都第三十三冊」、昭和38年）において、「『真意』は大自然の光景とそれを前にして立つ人間の、言葉では説明しえない一つの心理に関して（略）言われているのであるから、やはり淵明の人生態度の根本にかかわる発言であることが予想される。」（50ページ）といい、また、「『日の夕に佳しき山気、相い与に還に帰る飛鳥』に『此のうち真意あり』というとき、彼はこのような天地自然の世界の自由さ、いつわりなさ、本来的な清浄さに憧憬し、それを『真』とよんでいるのである。」（62ページ）と指摘している。

⑥ 「此中有真意、欲辨已忘言」の二句と、王弼「周易略例」（一巻）の「明象」篇との関連についても言及すべきかと考えるが、これについては堀池信夫氏「陶淵明の言と意―『飲酒其五』を中心に―」（平成九年度大塚漢文学会大会シンポジウム「陶淵明『飲酒』詩をめぐって」の報告発表原稿）に明晰に説かれているので、省略に従うこととした。

⑦ ○易之興也、其於中古乎。作易者、其有憂患乎（繫辞下伝、第七章）

○易之為書也、不可遠。（略）又明於憂患与故、无有師保、如臨父母（同右、第八章）

○易之興也、其当殷之末世、周之盛徳邪。当文王与紂之事

邪。是故其辞危。危者使平、易者使傾。其道甚大、百物不廃。懼以終始、其要无咎。此之謂易之道也（同右、第十一章）

⑧ 本稿をしるすに当たって、松本肇氏「陶淵明の帰鳥詩をめぐって―その成立と展開―」（「筑波中国文化論叢　3　一九八四年・筑波大学中国文学研究室）を参照した。